

# 歴史系エンターテインメント作品を通じての歴史に対する 関心涵養の可能性に関する予備的考察

\* 田 中 良 英

A Pilot Study on the Possibility of Increasing Students' Interests  
in History through History Comics

TANAKA Yoshihide

## Abstract

2006年の「世界史未履修問題」に象徴される、近年の日本社会における「歴史離れ」に関しては、歴史研究者・歴史教育者の双方に危機感が広がり、それが2022年度からの高等学校における歴史系教科再編の背景ともなっている。本稿では、この「歴史離れ」への対応策の一つとして、学校教育以外の場においても児童・生徒に歴史への関心を喚起し得るものと予測される、最近の歴史系エンターテインメント作品、とりわけ歴史漫画の現状の確認を図った。

当初の予想に反し、近年の歴史漫画は数が増加しているのみならず、扱う時期・地域・テーマも多様化しており、さらには学術的な知見と重なる内容を持つものも多い。それゆえ、これらを通じて歴史への関心を涵養すること、そして歴史を多様な観点から眺め思考することを伝える方途にも、大きな有効性が見込めるように思われる。ただしその一方、内容が低年齢層の講読に適さない作品もあり、そのまま活用することには一定の困難も予想される。また、もともと歴史に関心がない読者にいかにして手に取ってもらうか、そして歴史的背景に関する解説などが付されていない作品にどのような補完的情報を具体的に追加すべきかなど、今後の課題も見いだせる。

**Key words :** Education of History (歴史教育)

Interest in History (歴史的関心)

History Comic (歴史漫画)

Historical Thinking Mind (歴史的思考力)

## 1. はじめに

2006年のいわゆる「世界史未履修問題」の発覚を大きな契機として、日本社会における「歴史離れ」(桃木2008, PP. 17-21)が強く意識され、歴史研究者と歴史教育者の双方(あるいはその協働作業)から、これまでも多くの分析・提言が発表されてきた。その一つの帰結として、2022年度から施行される新たな「高等学校学習指導要領」において、地理歴史科の歴史分野が「歴史総合」「世界史探究」「日本史探究」に再編され、新たなカリキュラムを通じての歴史に対する関

心の喚起が期待されている。「アクティブ＝ラーニング」を志向した授業実践のためのシリーズや資料集などの刊行も最近目立つ。

ただし今日、我々が「歴史に出会う」機会はずしでも教育機関の内部のみに限られているわけではなく、南塚(2019, P. 4)でも指摘されるように、社会にはむしろ遍在しているとも言える。田中・堀田・津田(2020)において、仙台市及び周辺の6小学校の小学4～6年生に調査したところでも、歴史に対する関心は、小学6年生で歴史分野の授業が始まるより以前、それも歴史漫画など、教育現場以外の経路から生じる傾向が

---

\* 社会科教育講座

看取された。

しかしながら、このように歴史と接する機会が最近でも一定程度存在するのだとすると、なぜ「歴史離れ」が生じてくるのか、疑問も湧いてくる。この点に答える一つの材料として、田中・堀田・津田(2020)では、大学1年生に対するアンケート結果を基に、中学校・高等学校と歴史に接する機会が授業中心になるにしたがい、学校の授業の影響力が強まる結果、逆に歴史を嫌いになる学生も現われてくる点を示唆した。その意味では、中・高等学校の新学習指導要領施行を契機に、授業実践が変わる可能性があることは、一定の変化に資するものと期待されるであろう(ただし、授業実践自体が実際に変化するかどうかは、現時点では十分には見通せないが)。

その一方で、とりわけ小学生や就学以前の児童・生徒に顕著のように、学校以外の場でも歴史への関心を抱くのであれば、中学生や高校生も含め、それらの機会を尊重するという考え方もあり得る。本稿では、こうした可能性の是非を検討するうえで、歴史系エンターテインメント作品、その中でも上述のように児童・生徒による接触頻度が相対的に高い歴史漫画の現状を確認することを目的とする。歴史に出会う諸種の機会を整理した南塚(2019)では、歴史漫画の特徴・問題点として、ストーリーが明快かつ面白い反面、因果関係が単純であったり、面白くないことは扱われなかったりする傾向がある点、人物や生活、風景に関するイメージが、時に現代的感覚を備えた作者の提供する図像を通じて、読者に一方的に与えられる点、そして史実の確定のプロセスが説明されていない点などが指摘されており(PP. 14-15)、これらは確かに歴史叙述の一端として歴史漫画を捉える場合には、妥当な批判と言えよう。この南塚の見解は『日本の歴史』や『世界の歴史』など、いわゆる学習漫画を対象としたものだが、本稿が扱うエンターテインメント性の強い漫画作品においては、もともとの目的が異なることもあり、これらの特徴は一層強まるものと思われる。

とはいえ、南川も認めるように、学習漫画を含め歴史漫画には「歴史に興味を持ち、もっと歴史を知りたいと思う人が出てくる(P. 14)」力があることも事実であり、そうした歴史への興味・関心こそをまずは最優先しようとするのが本稿の立場である。小川原・向(2015, PP. 206-207)が、数値は比喩と断わりながら

も、近年の大学生を「幼い頃から(なぜか)歴史好きだったりして、歴史を学ぶことの意味を深く考えてこなかった」1%の「コアな歴史好き(将来の歴史研究者を含む)」と、「なぜことさらに歴史を知り、学ぶ必要があるのか、つねに疑問を抱かずにはいられない」99%の「非歴史系プロパー(「ほとんどすべての社会人」も同様とされている)」とに大別するのであれば、後者を対象とする歴史教育の新たな戦略と同時に、この比率自体を、前者を拡大させる方向で変化させることもまた、歴史理解の向上を促すうえで有効な手立てになり得るものと考えられる。

また、2020年春からの新型コロナウイルスの感染拡大危機に伴う、教室使用の制限や授業のオンライン化は、学習機会が教育機関の内部のみに留まらない可能性を改めてあらわにした。こうした事態に際し児童・生徒の学習の遅れが危惧されているが、今後同様の事例が生じた場合に対処する意味でも、家庭など学校外での生活や活動内容に一定の教育的効果を付与することの意義は大きいように思われる。

本稿では、このように歴史と接する機会を最大限活用しようとする観点から、いわゆる学習漫画シリーズではなく、一般の漫画雑誌(WEB誌を含む)に掲載されたエンターテインメント作品を対象とする。これらの数は膨大であるため、最近の読者が入手しやすい作品に特化すべく、1. 2020年9月現在で連載中のもの、2. すでに完結したものについては、2010年以降に連載が始まったもの、に限定した。また、実際の歴史理解に資することを目的とするうえで、時代・地域が推定できないもの、推定できる作品でも、その時代背景が明確に描写されていなかったり、仮想上の世界を対象としていたりするものは除いている。

こうしたエンターテインメント作品と歴史教育との接合の可能性に関連しては、2017～18年に岡山大学文学部の授業「西洋史学入門」において、中世修道院史を専攻する大貫俊夫准教授(当時)が、中世ヨーロッパを舞台とする歴史漫画『刃獄のシュヴェスタ』の作者や編集者、『チェーザレ』の監修者らを大学に招き、事前に作品内の出来事、舞台装置、時代背景などを調査した受講生との交流を図った事例が、『朝日新聞』岡山地方版に紹介されている(2017年10月31日朝刊、11月26日朝刊、2018年1月19日朝刊、1月29日朝刊)。また、やはり2017年には立教大学文学部史学

科の必修授業「入門演習」の一環として、ヴァイキングの世界を描く歴史漫画『ヴィンランド・サガ』の作者である幸村誠氏の講演会が、同大学の小澤実教授により開催されている（幸村2018）。これらの事例には、歴史漫画がはらむエネルギーや訴求力を教育に活用しようとする、本稿と共通の問題意識が反映されているように思われる。

ちなみに歴史叙述としての歴史漫画については、渡辺（2015）が、複数の視点・語りを内包し得る少女漫画の表現技法が、歴史叙述とはなじみにくい——近代以降の歴史叙述が、国民国家に代表される共同体が共有すべき、単一の歴史観の発信に収斂されがちだったため——点を指摘するなど、叙述スタイルに踏み込んだ詳細な分析もある。ただし本稿は、表現形式よりもまずはテーマや内容の概括的な認知に力点を置く点で、立場を異にしている。

なお以下、具体的に作品を取り上げるうえで、作品の内容や構造、体裁について触れる部分があるが、これはあくまで歴史教育との接合可能性を尺度とした指摘であり、作品そのものの優劣を論じたり批判したりすることを意図したものではない点を、改めて強調しておきたい。歴史漫画が必ずしもいわゆる科学的な歴史叙述を意図しているわけではなく、また正確さの追求が、逆に作者の意図や作品の完成度・娯楽性を阻害しかねないことがある点は、十分に理解しているつもりである。

## 2. 日本における歴史漫画の現状

今回の調査を開始するに当たり、近年の「歴史離れ」を考えると、歴史上の人物や事件を扱ったエンターテインメント作品は減少しているものと予想していたが、実のところ、先述のような範囲の限定を付した場合でも、その数は極めて多いことが判明した（それでも網羅しきれていない可能性がある点は、御容赦をいただきたい）。恐らくは、WEBでの配信も含めた出版形態の多様化にもよるだろうが、大阪大学歴史教育研究会編（2014, PP. 7-8）に挙げられている歴史を学ぶ意義や効用の一つとして、「『事実は小説よりも奇なり』というように、歴史のいろいろなエピソードや人物像は面白い。良質な娯楽としての歴史としての効用は十分に大きい」点も、依然日本社会、特にエンター

テインメント業界の中で意識されているように思われる。

これらの作品は大きくは、A. 実在の人物を主人公としているもの（作者自身はあくまでモデルとしているだけで、歴史上の人物とは異なると明記している場合もあるが、その人物像や時代性が同名の実在人物と大きく重なるものと判断される作品については、こちらのカテゴリーに含めた）、B. 架空の人物を主人公としているもの（ただし周囲には実在の人物が配置されている作品も多い）に分けられ、それぞれ下記の表1と表2に対応している。表1の方が表2よりも作品数が多い点は非常に興味深い。完全な創作というよりは、当該の人物に関する既成のイメージを利用しつつ、そこに新規の情報や新たな解釈を付加することで、読者の予想を裏切ろうとする点に、娯楽性を見いだしているものと思われる。

これら双方の作品群から抽出される全般的な特徴について、まずはいくつか指摘することにした。

表1 実在の人物が主人公の歴史漫画

作品	作者	掲載雑誌	出版社	掲載期間	巻数	対象時代・地域	登場する主要人物	解説	監修者	メディア展開
阿・吽	おかざき真里	月刊スピリッツ (のち週刊ビッグコミックスピリッツ)	小学館	2014年7月号～	12	8世紀日本	最澄、空海 (、桓武天皇、和氣清麻呂)	あり (作者)	阿吽社	
碧いホルスの瞳―男装の女王の物語―	犬童千絵	ハルタ	KADOKAWA	Vol. 20 (2014年12月号)～	7	前15世紀エジプト	ハトシェプスト (、トトメス2世)	あり (作者)	なし	
アサギロ～浅葱狼～	ヒラマツ・ミノル	ゲッサン	小学館	2009年6月号～	21	19世紀日本	沖田総司、島崎勝太 (近藤勇)	なし	なし	
アド・アストラースキピオとハンニバル	カガノミハチ	ウルトラジャンプ	集英社	2011年4月号～ 2018年2月号	全13	前3世紀地中海世界	ハンニバル、大スピキオ	あり (作者)	なし	
いくさの子―織田三郎信長伝―	原哲夫 (北原星望原作)	月刊コミックゼノン	コアミックス	2010年12月号～	14	16世紀日本	織田信長 (、織田信秀、今川義元)	なし	なし	
イノサン	坂本眞一	週刊ヤングジャンプ	集英社	2013年9月号～ 2015年20号	全9	18世紀フランス	C. - H. サンソン (、王太子ルイ、マリ = アン・トワネット)	なし	なし	
イノサン Rouge	坂本眞一	グラランドジャンプ	集英社	2015年12月号～ 2020年3号	全12	18世紀フランス	C. - H. サンソン (、ルイ16世)	なし	なし	
ヴラド・ドラクラ	大窪晶与	ハルタ	KADOKAWA	Vol. 44 (2017年5月号)～	3	15世紀ルーマニア	ヴラド3世	なし	なし	
Fの密命	秋月カイネ	WEBコミックアクション	双葉社	2017年5月～ 2019年1月	全2	19世紀中国	R. フォーチュン	なし	なし	
エルジェーベト	Cuvie	NEMESIS (月刊少年シリウス別冊) (のちコミックDAYS (WEB漫画サイト))	講談社	33号 (2017年4月)～ 2020年2月	全3	19世紀オーストリア = ハンガリー	皇妃エリザベート (、フランツ = ヨーゼフ1世)	なし	なし	
応天の門	灰原葉	月刊コミック@パンチ (現月刊コミックパンチ)	新潮社	2013年12月号～	13	9世紀日本	在原業平、菅原道真 (、伴善男、藤原基経)	あり (本郷和人)	本郷和人	
海帝	星野之宣	ビッグコミック	小学館	2018年14号～	6	15世紀中国	鄭和 (、永楽帝、建文帝)	あり (作者)	なし	
川島芳子は男になりました	田中ほさな	月刊少年シリウス	講談社	2019年12月号～	2	20世紀中国	川島芳子 (愛新覺羅顯玕) (、溥儀)	なし	なし	
宮廷画家のうるさい余白	久世番子	別冊花とゆめ	白泉社	2017年10月号～	1	17世紀スペイン	D. ベラスケス (、フェリペ4世)	あり (作者)	なし	
傾国の仕立て屋 ローズ・ベルタン	磯見仁月	月刊コミックバンチ	新潮社	2019年2月号～	3	18世紀フランス	M. - J. ベルタン (、デュ = バリー夫人、マリ = アントワネット)	あり (作者)	なし	

こうらんりゅうすい (徐福)〈信長〉	本宮ひろ志	グラランドジャンプ	集英社	2017年4号～ 2019年23号	全8	前3世紀中国・日 本	徐福、織田信長(、始 皇帝)	なし	なし	
サムライ先生	黒江S助	クロフネZERO(現ク ロフネ、電子雑誌)	リブレ	2013年11月～	7	21世紀日本	武市瑞山(、坂本龍馬、 岡田以蔵)	あり(作者)	山田順子	TVドラマ、 実写映画
7人のシエイクスピア	ハロルド作石	週刊ビックコミック スピリッツ	小学館	2010年3・4合 併号～2011年50 号	全6	16世紀イングラン ド	W.シエイクスピア(、 エリザベス1世)	なし	なし	
7人のシエイクスピア NON SANZ DROICT	ハロルド作石	週刊ヤングマガジン	講談社	2017年2・3合 併号～	13	16世紀イングラン ド	W.シエイクスピア(、 エリザベス1世)	あり(指昭博)	なし	
終末のワルキューレ異 聞 呂布奉先飛将伝	オノタケオ (終末のワル キューレ原 作)	月刊コミックゼノン	コアコミック ス	2019年12月号～	2	3世紀中国	呂布(、董卓、劉備、 曹操、孫堅)	なし	なし	
将軍の血	今井ムジイ	月刊コミックフラス ター	KADOKAWA	2018年8月号～	3	17世紀日本	徳川家光(、徳川家康、 徳川秀忠)	なし	なし	
昭和天皇物語	能條純一(半 藤一利原作)	ビックコミックオリ ジナル	小学館	2017年9号～	6	20世紀日本	昭和天皇(、乃木希典、 東郷平八郎)	なし	志波秀宇	
新九郎、奔る!	ゆうきまさみ	月刊スピリッツ(のち 週刊ビックコミック スピリッツ)	小学館	2018年3月号～	4	16世紀日本	伊勢新九郎(北条早雲) (、細川勝元、山名宗全)	なし	なし	
センゴク一統記	宮下秀樹	週刊ヤングマガジン	講談社	2012年31号～ 2015年45号	全15	16世紀日本	仙石秀久(、織田信長、 羽柴秀吉)	あり(作者)	なし	
センゴク権兵衛	宮下秀樹	週刊ヤングマガジン	講談社	2015年50号～	20	16世紀日本	仙石秀久(、羽柴秀吉)	あり(年表)	なし	
猛き黄金の国 柳生宗 矩	本宮ひろ志	ビジネスジャンプ	集英社	2010年9号～ 2011年9号	全3	16～17世紀日本	柳生宗矩(、徳川家康、 徳川家光)	なし	なし	
チェーザレ	総領冬実	週刊モーニング	講談社	2005年17号～	12	15世紀イタリ ア	C.ボルジア、ジョヴァ ンニニニニニニニニニ (教皇レオ10世)	あり(監修者、 佐々木毅)	原基昌	
ちるらん 新撰組鎮魂 歌	橋本エイジ (梅村真也原 作)	月刊コミックゼノン	新潮社	2012年10月号～	28	19世紀日本	土方歳三(、近藤勇、 沖田総司、勝海舟、松 平容保)	なし	なし	
天智と天武—新説・日 本書紀—	中村真理子	ビックコミック	小学館	2012年17号～ 2016年15号	全11	7世紀日本	天智天皇、天武天皇(、 蘇我入鹿)	なし	なし	園村昌弘
ナポレオン—覇道進撃 —	長谷川哲也	ヤングキングアワー ズ	少年画報社	2011年3月号～	19	18～19世紀フ ランス	ナポレオン=ボナパル ト	なし	なし	
涙の乙女 大西巻一短 編集	大西巻一		双葉社	2015年5月刊行	全1	16世紀イ ンガ、 14・19世紀フ ランス	M.ボスール、J.=ド= ベルヴイル、インカ皇 女イネス	あり(作者)	なし	

ノブナガ先生	大和田秀樹	WEBコミック描きおろし	日本文芸社	2017年～2020年	全6	21世紀日本	織田信長、森蘭丸	なし	なし	
信長を殺した男～本能寺の変 431年目の真実～	藤堂裕(明智憲三郎原案)	別冊ヤングチャンピオン	秋田書店	2016年9月号～	7	16世紀日本	明智光秀(、織田信長)	あり(原案者)	なし	
薔薇王の葬列	菅野文	月刊プリンセス	秋田書店	2013年11月号～	14	15世紀イングランド	リチャード3世(、ヘンリー6世)	なし	なし	TVアニメ(予定)
パリピ孔明	小川亮(四葉タト原作)	コミックDAYS(WEB漫画サイト)	講談社	2019年12月～	2	21世紀日本	諸葛孔明	なし	なし	
パトラと鉄十字	真鍋譲治	月刊キスカ	竹書房	2019年6月号～	2	20世紀エジプト	クレオパトラ	なし	なし	
ハーロー草と鉄と羊一	瀬下猛	週刊モーニング	講談社	2018年2・3合併号～2020年12月号	全12	13世紀モンゴル	源義経(チンギス=ハーン)	なし	なし	
ヒストリエ	岩明均	月刊アフタヌーン	講談社	2003年3月号～	11	前4世紀ギリシア	エウメネス(、アリストテレス、アレクサンドロス)	なし	なし	
PEACE MAKER 鐵(くろがね)	黒乃奈々絵	月刊コミックブレイド(のちWebコミックBeat's・月刊コミックガーン(ほか))	マッグガーデン	2002年4月号～	17	19世紀日本	市村鉄之助(、土方歳三、沖田総司、坂本龍馬)	なし	なし	劇場版アニメ
卓弥呼—真説・邪馬台国伝—	中村真理子(リチャード・ウー原作)	ビッグコミックオリエジナル	小学館	2018年18号～	4	3世紀日本	日見子(卓弥呼)	あり(園村昌弘)	なし	
ふしぎの国のパード	佐々大河	ハルタ	KADOKAWA	Vol.16(2014年6月号)～	7	19世紀日本	I. パード	なし	なし	
プリニウス	ヤマザキマリ、とりみき	新潮45(のち新潮)	新潮社	2014年1月号～	10	1世紀ローマ	大プリニウス(、ネロ、セネカ)	なし	なし	
ふることふひと	壺村仁・風越洞	MAGCOMI(WEB漫画サイト)	マッグガーデン	2019年9月～	2	7世紀日本	藤原不比等(、天武天皇、太安萬呂)	なし	なし	
ホークウッド	トミイ大塚	コミックヒストリア(WEB漫画サイト)(のち月刊コミックフラッパー)	KADOKAWA	2010年8月～2016年1月号	全8	14世紀フランス	J. ホークウッド(、エドワード3世、エドワード黒太子)	あり(作者)	なし	
ボワゾン～龍姫ボンパドールの生涯	霜月かよ子(こやまゆかり原作)	ハッキス	講談社	2014年7月号～2016年11月号	全3	18世紀フランス	ボンパドール夫人(、ルイ15世)	なし	なし	
前田慶次かぶき旅	出口真人(原哲夫・堀江信彦原作)	月刊コミックゼノン	ノース・スターズ・ビジュアル	2019年4号～	4	17世紀日本	前田慶次(、徳川家康、加藤清正、佐々木小次郎)	なし	なし	

無限の住人～幕末ノ章～	陶延リュウ (滝川廉治原 作)	月刊アフタヌーン	講談社	2019年7月号～	2	19世紀日本	中浜万次郎(、坂本龍 馬、近藤勇)	なし	なし	
ヤマトタケル	安彦良和	サムライエース(の ちWEB漫画サイト 『Comic Walker』)	KADOKAWA	Vol.1 (2012年8 月号)～2018年 6月	全6	4世紀日本	小碓皇子(ヤマトタケ ル)(、景行天皇)	あり(作者と 松本武彦、平 林彰章仁との 対談)	なし	
劉邦	高橋のぼる	ビッグコミック	小学館	2017年14号～	8	前3世紀中国	劉邦(、蕭何、項羽)	あり(作者)	なし	
煉獄に笑う	唐々煙	時代活劇画伝一斬一 ZAN(のちWEBコ ミックBeat's)	マッグガー デン	2013年12月～	12	16世紀日本	石田光成、豊臣秀吉	なし	なし	舞台

【註】「巻数」(刊行された単行本の巻数)は、2020年9月30日時点でのもの(表2でも同様)。「登場する主要人物」欄の( )内については、読点がない場合は直前の人物の別称、冒頭に読点がある場合は他の主要登場人物を表わす。これら「登場する主要人物」「登場する実在人物」(表2)については、スペースの関係上、あくまで一例にとどまる。

表2 架空の人物が主人公の歴史漫画

作品	作者	掲載雑誌	出版社	掲載期間	巻数	対象時代・地域	登場する実在人物	解説	監修者	メディア展開
赤い瞳のヴァイクトルカ 乙女戦争外伝I	大西巷一	月刊アクション	双葉社	2020年1月号～ 2020年5月号	全1	15世紀チェコ	ヴァーツラフ4世	あり(作者)	なし	
アルキメデスの大戦	三田紀房	週刊ヤングマガジン	講談社	2015年52号～	21	20世紀日本	山本五十六、永野修身	あり (後藤一信)	なし	実写映画
アルテ	大久保圭	月刊コミックゼノン	コアミックス	2013年12月号～	13	16世紀イタリア	カステイリヤ王女カ タリーナ	なし	なし	TVアニメ
あをによし、それもよ し	石川ローズ	グラウンドジャンプ Premium(現グラウンド ジャンプむちゃ)	集英社	2017年10月号～	3	8世紀日本	大伴旅人、長屋王、藤 原四子	なし	なし	
アンゴルモア 元寇合 戦記	たかぎ七彦	サムライエース(のち Comic Walker)	KADOKAWA	Vol.5 (2013年4 月号)～	13	13世紀日本	北条時宗、少貳景資、 少貳資能	あり(作者)	なし	TVアニメ
イサク	DOUBLE-S、 (真刈信二原 作)	月刊アフタヌーン	講談社	2017年3月号～	9	17世紀中部ヨー ロッパ	ヴァレンシユタイン	なし	なし	
乾と巽—ザバイカル戦 記—	安彦良和	月刊アフタヌーン	講談社	2018年11月号～	3	20世紀ロシア	カザーク頭領G.セ ミョーノフ、A.コル チャーク	あり(年表)	なし	
ヴァインランド・サガ	幸村誠	週刊少年マガジン	講談社	2005年20号～	23	11世紀北ヨーロッ パ	クヌート1世	なし	なし	TVアニメ

エーゲ海を渡る花たち	日之下あかめ	COMICメテオ (WEB漫画サイト)	フレックスコミックス	2018年8月～	3	15世紀地中海世界		あり(作者)	なし	
王家の紋章	細川智栄子あんど美～みん	月刊プリンセス	秋田書店	1976年10月号～	66	前27世紀エジプト	イムホテプ	なし	なし	舞台
大奥	よしながふみ	MELODY	白泉社	2004年8月号～	18	17～19世紀日本	徳川家光、春日局、徳川綱吉	なし	なし	TVドラマ、実写映画
狼の口 ヴォルフスムント	久慈光久	Fellows! (現ハルタ)	KADOKAWA	Vol.3 (2009年2月号)～Vol.38 (2016年10月号)	全8	14世紀スイス		なし	なし	
乙女戦争 デイイーザチー・ヴァールカ	大西巷一	月刊アクション	双葉社	2013年7月号～2019年6月号	全12	15世紀チェコ	(J.フス)、神聖ローマ皇帝ジギスムント	あり(作者)	なし	
乙嫁語り	森薫	Fellows! (現ハルタ)	KADOKAWA	Vol.1 (2008年10月号)～	12	19世紀中央アジア		なし	なし	
オリンピア・キエクロス	ヤマザキマリ	グラウンドジャンプ	集英社	2018年8月号～	4	前5世紀ギリシア	プラトン、ソクラテス	あり(作者)	なし	TVアニメ
海王ダンテ	皆川亮二(泉福朗原作)	ゲッサン	小学館	2016年1月号～	10	18世紀イギリス		なし	なし	
甲冑武闘一アーマード・バトルー (短編集)	久慈光久	ハルタほか	KADOKAWA	2019年4月刊行	全1	1世紀ローマ、15世紀イングランド	ヨーク公リチャード、エドワード4世	なし	なし	
鬼哭の童女 異聞大江山鬼退治	麻貴早人	マゴコミ (WEB漫画サイト)	マッグガーデン	2018年8月5日～2020年?	全3	11世紀日本	源頼光	なし	なし	
侠医冬馬	村上もとか・かわのいちろう	グラウンドジャンプ	集英社	2018年15月号～	3	19世紀日本	福沢諭吉	なし	酒井シヅ	
キングダム	原泰久	週刊ヤングジャンプ	集英社	2006年9月号～	59	前3世紀中国	嬴政(始皇帝)	なし	なし	
九国のジューシ	西公平	ハルタ	KADOKAWA	Vol.66 (2019年7月号)～	1	16世紀日本	高橋紹運	なし	なし	
ゴールデンカムイ	野田サトル	週刊ヤングジャンプ	集英社	2014年38号～	23	20世紀日本	土方歳三、アレクサンドル2世	なし	言語監修複数	TVアニメ
最後のレストラ	藤栄道彦	月刊コミック@パンチ (のち月刊コミックパンチ)	新潮社	2011年4月号～	15	21世紀日本		あり(作者)	なし	
颯汰の国	小山ゆう	ビッグコミック	小学館	2019年2月25日号～	5	17世紀日本		なし	山田順子(時代考証)	
第3のギアオン	乃木坂太郎	ビッグコミックスベリオール	小学館	2015年12月号～2018年10号	全8	18世紀フランス	ルイ16世、ロベスピエール	なし	なし	



達人伝—9万里を風に乗り—	王欣太	漫画アクション	双葉社	2013年1月22日号～	27	前3世紀中国	(荘氏)、秦王政(始皇帝)	なし	なし	
テングの国	泉一聞	別冊少年マガジン	講談社	2017年11月号～ 2019年11月号	全5	18世紀チベット		あり(作者)	なし	
天の血脈	安彦良和	月刊アフタヌーン	講談社	2012年3月号～ 2016年11月号	全8	20世紀東北アジア	内田良平、張作霖	あり(年表)	なし	TVアニメ、 TVドラマ、 実写映画
信長協奏曲	石井あゆみ	ゲッサン	小学館	2009年6月号～	20	16世紀日本	織田信長	なし	なし	
信長のシチュエ	梶川卓郎(西村ミツル原作)	週刊漫画TIMES	芳文社	2011年3月18日号～	27	16世紀日本	織田信長	あり(作者)	なし	TVドラマ
信長の忍び	重野なおき	ヤングアニマル	白泉社	2008年12号～	17	16世紀日本	織田信長	あり(谷口克広)	なし	
辺獄のシチュエスタ	竹良実	月刊！スピリッツ	小学館	2015年2月号～ 2017年12月号	全6	16世紀ドイツ		なし	なし	
めしあげ!!～明治陸軍糧食ものがたり～	清澄桐一	ヤングエース	KADOKAWA	2017年5月号～ 2020年3月号	全5	20世紀日本	白瀬謙、乃木希典、明石元二郎	あり(軍事法規研究会)	あり(軍事法規研究会)	

【註】「登場する実在人物」欄の( )内については、姿は現われないものの、重要人物として人名が登場する者を表わす。

### (1) 時代・地域の多様性

日本の出版史上でこれまで発表されてきた歴史漫画を統計的に整理した経験はないため、あくまでも印象論ではあるが、対象とされている時期や地域は飛躍的に拡大しているように思われる。例えば、表2に登場する森薫『乙嫁語り』は、19世紀中葉以降のカスピ海周辺から物語が始まり、次第に中央アジア全域へと舞台を広げていく。こうした地域自体の目新しさにとどまらず、題名が示すように、現地に生活する女性の習俗・意識が主たる対象の一つとして緻密に描かれている点も、まさに従来の空隙を埋めるテーマと言える。ちなみに同作品は、「マンガ大賞2014」の受賞に象徴されるように、エンターテインメント作品としても高い評価を受けている。

また泉一聞『テンジュの国』も18世紀チベットという、従来あまり取り上げられなかった時代・地域を舞台にしている点、医者見習いの13歳の少年と異国から嫁いできた少女との交流といった日常性を題材にしている点で、『乙嫁語り』と性格的に共通する部分が多い。枠外に配置される豆知識は、チベット理解を高める機能を果たしている。

日本史についても、NHKの大河ドラマで最近連続して扱われがちな戦国時代や幕末以外に、古代、中世、近現代など様々な時代が取り上げられている。日常性という点では例えば、実際に日本を訪れたイギリス人女性探検家イザベラ＝バード(1831～1904)を主人公とする佐々大河『ふしぎの国のバード』が、むしろ我々現代の日本人も直接には知らない、明治維新によって失われゆく日本古来の習俗を丹念に描写しており、後述するアイヌ文化にとどまらず、日本の近代化・国民国家化がヨーロッパ化の方向性において多くの伝統を解体しながら進められた構図を示唆する。

### (2) 最新の研究動向の活用

必ずしも参考文献を明記していない作品も多いため、典拠は不明ながら、個人や事件に対し、近年の学術的研究の成果に基づく新たな評価・解釈を提示する作品も目立つ。例えば、表1にある中村真理子『天智と天武一新説・日本書紀一』は、題名のごとく、中大

兄皇子(天智天皇、626～72)と大海人皇子(天武天皇、686年没)を主人公とするが、彼らの人物像や周囲の人物との関係性は定説とは大きく異なる。飛鳥時代の推古朝については、新学習指導要領に基づき2020年度から使用されている小学校教科書でも依然、女帝の摂政としての聖徳太子(厩戸皇子)の指導的役割が指摘されているが、高橋・三谷・村瀬(2016, PP. 18-21)によると、当時における蘇我馬子(551?～626)の発言力や推古天皇(554～628)の政治的主体性を認める学術的な見解を受け、高等学校の教科書ではすでに、太子の権力は絶対的なものとは描かれていない。大山(2015)によると、「『日本書紀』と法隆寺系史料を始めとする」すべての聖徳太子関係史料が後世に作られたもので、聖徳太子の存在を証明するものは皆無」であり、その点を論拠として聖徳太子自身の存在を否定する仮説も存在する。

この『天智と天武』でも、蘇我入鹿(611?～45)謀殺の首謀者の一人、中臣(藤原)鎌足(614～69、本作ではその前身は百済の王子・豊璋とされる)の息子である藤原不比等(659～720)が、蘇我氏を批判する文脈で編纂を主導した『日本書紀』自体の欺瞞性を示しつつ、それがさらに奈良時代に書き換えられたものとして位置付けられる。そしてこの変更の際し、不比等の『日本書紀』では悪人として描かれる蘇我入鹿とは別に、人望厚き本来の蘇我入鹿の姿を「聖徳太子」という架空の存在に仮託する形で追記したとされる。この作品では、大海人皇子の父を蘇我入鹿としており<sup>1</sup>、その入鹿を中大兄が謀殺したことが兄弟間の対立の要因になったと描くなど、虚構性が高い部分も見受けられる一方で、歴史的事実があくまで史料を通じて接近可能である点、その史料自体が改変されている可能性がある点を示唆していることは、歴史認識のメカニズムの本質を示していると言えよう<sup>2</sup>。

### (3) 戦記ものの遍在

記述量が限定される学校教科書では、歴史的な変化を生む「大事件」として、とりわけ戦争や政変に記述が割られることが多いが、歴史漫画においても同様の関心が看取される。ただしその扱いは、上述の(2)(時

1 この構図は、聖徳太子の皇子、山背大兄(643年没)の父を蘇我毛人(蝦夷、586?～645)と描く山岸涼子『日出処の天子』(1980～84年)のオマージュと捉えられるかもしれない。蘇我入鹿の善人ぶりも両作に共通している。

には(1も)の傾向を共有する。秦による中国大陸制覇の過程を描く原泰久『キングダム』、アレクサンドロス(前356～前323)の東征を時代背景とする岩明均『ヒストリア』、第2次ポエニ戦争(前218～前201)におけるローマとカルタゴの死闘を詳述するカガノミハチ『アド・アストラススキピオとハンニバル』、元寇を題材とするたかぎ七彦『アンゴルモア 元寇合戦記』、英仏百年戦争期(1339～1453年)の實在の傭兵を主人公とするトミイ大塚『ホークウッド』、カトリック批判により火刑に処されたJ. フス(1370?～1415)の支持者たちによる神聖ローマ皇帝ジギスムント(1368～1437)との軍事対立、通称フス戦争(1419～36年)を描写する大西巷一『乙女戦争 ディーヴチー・ヴァールカ』など、近年の戦記ものの範囲は極めて広い。また、これらはいずれも高等学校「世界史B」(元寇については周知のように小学校社会科教科書に既出)の教科書にも登場する有名な戦役を対象としているとはいえ、その詳細な戦場描写の点で、教科書の簡潔な説明とは大きく印象が異なる。教科書においては、殺傷能力を始め具体的な装備や戦法などが解説されることはほとんどないが、実際にはそうした情報抜きに戦場での身体的・心理的負担や暴力性を理解することは不可能であろうし、それがあってこそ戦争や暴力に対する評価も実感を伴うものとなろう。(1)で挙げた日常性を題材とする作品とは方向性が異なるように見えるかもしれないが、いずれも人間社会において起こったこと、あるいは起こり得たことを視覚的に表現するものであり、それらからの多様な情報や予測は、社会をさまざまな分野から多面的・複合的に眺めるうえで重要な基盤となり得る。

また、特定の戦争を扱っているわけではない点で戦

記ものとはやや呼びがたいものの、ヴァイキングらによる種々の戦闘を描く幸村誠『ヴィンランド・サガ』を含め、これらの作品では、洋の東西を問わず古代から中世における戦場その他の暴力性が示唆されているが<sup>3</sup>、その評価に際しては同時代的な文脈での理解が必要となる。人員や物資の略奪を含め、確かに現代的な観点からすると非人道的に見える行為も数多く登場するが、中世ヨーロッパにおいては、フェーデ(自力救済)に象徴される暴力の行使自体が、むしろ一人前の人間にとって果たすべき必須の権利と認められていたことを考えれば、それらの行動が当時はむしろ肯定的に捉えられていた可能性もあり得る。これら読者自身の価値観と異なる世界を描く作品を前にして、そのような考え方を一概に否定せず、当時なりの合理性がないか改めて検討しようとする能力は、歴史研究にとって必要な資質にとどまらず、グローバル社会の中での異文化理解にも資する力になり得ると言えよう。

なお例えば『アンゴルモア』は、一口に元寇とはいえ、モンゴル軍による博多湾来襲の前哨戦に当たる対馬での戦闘を描く点で、元寇という事件が持つ多面性を示唆する(ただし、博多襲来については現在連載中の第2部で扱われている)。本作では、襲来したモンゴル軍が漢民族・モンゴル民族・女真人・高麗人など多様な民族により編成されていた点を明示するとともに、その背景となるモンゴル帝国の諸民族統治体制や高麗王国の服属過程の説明、向(2020, PP. 196-197)にも指摘される、投石機と火器を用いたモンゴル軍の攻城戦技術の卓越など、学術的な知見とも重なる情報が包含されている。武士の恩賞に対する執着が、必ずしも国家への忠誠心と一致しない点の描写も、武士の心性を理解する一助となる。

- 
- 2 なお、『古事記』の成立についても、藤原鎌足の息子、中臣史(なかとみのふひと)が大海人大君(天武天皇)の命を受け、自身の暗記する従来の史書(現存せず)の内容を基に、新たな史書の編纂に努める姿を描く、壺村仁・風越洞『ふることふひと』がWEB上で連載中である(この作品では、史が正体を偽るため、女装して稗田阿礼を名乗り、やまとことばの達人、太安萬侶と協働するという設定になっている。また史の正体は、天智天皇から鎌足に託された彼の皇子とされる)。こうした作品の発生自体、現代日本において、日本古代史最大の典拠、『日本書紀』と『古事記』の成り立ちに対する関心が広く存在することの表われと感じられる。他方、『古事記』や『日本書紀』の記述に一定の妥当性を認め、ヤマトタケル(少なくともそのモデルとなった人物)の實在を主張する安彦良和『ヤマトタケル』のような立場も存在する。なお日本古代史とともに、近現代史をライフワークとする安彦氏には、好太王碑や好太王陵を手がかりに、日露戦争前後の満洲で古代の日韓関係の実像を探る架空の歴史学徒を主人公とした『天の血脈』、1918～22年のシベリア戦争(シベリア出兵)における諸勢力間の相克を描く『乾と巽—ザバイカル戦記—』などの近作もある。
- 3 同様の暴力性を顕示する作品としては、ハプスブルク家の支配下にある関所ヴォルフスムント(「狼の口」)を舞台に、関所破りを図る者たちへの過酷な拷問・処刑を描写する久慈光久『狼の口 ヴォルフスムント』なども挙げられよう。

#### (4) 人気ジャンルとの融合

エンターテインメント作品において、ミステリーの人気は依然高く、さらに近年ではグルメものの分野も活況を見せているように思われるが、これらの人気ジャンルの性質を帯びた歴史漫画もある。もともと歴史研究自体が証拠(史料)を基に過去の「謎」を多様な観点から追究する点で、ミステリーと共通する性質が強く、イングランド国王リチャード3世(1452～85)の再評価をテーマとする歴史小説J. テイ『時の娘(The Daughter of Time)』(1951年)などの作品も過去に存在したが<sup>4</sup>、灰原葉『応天の門』は菅原道真(845～903)と在原業平(825～80)という2名の実在人物のコンビを探偵役に据えながら、必ずしも歴史上の謎が対象ではなく、架空の事件の解明が中心になっている点で、より純粋なミステリー作品としての性格を示す。社交的で活動的な業平と頭脳明晰ながら偏屈な道真の人物造形には、実在人物のイメージが反映されつつも、古典的なミステリーの語り部と探偵との姿が重ねられているように見える。

また、食を題材とする歴史漫画の一例としては、清澄炯一『めしあげ!!～明治陸軍糧食物語～』が挙げられる。同作では、空腹を満たすべく陸軍に志願した架空の主人公の活躍を通じ、各々の局面での食事の内容を中心としながら、日露戦争の情景と白瀬轟(1861～1946)による南極探検隊の行程とが丹念に描写されている。先述の戦記ものとも重なることだが、たとえ戦時や戦場であれ、兵員が生物としての人間である限り、衣食住を欠いては十分な活動は困難である。しかしながら教科書の記述にこうした情報が示されることはほとんどなく、それゆえに児童・生徒が歴史的事象を自分たちに引き付けて想像することが困難になっているとすれば、これらの作品にはそのような空隙を補う効果も期待される。

#### (5) タイムスリップものの双方向性

タイムスリップにより異なる時代に迷い込んだ人物が、もともと生きていた時代の価値観や技術を現地に持ち込むことで違和感や変化を喚起する作品も散見され、それらは二様の方向で描かれている。表1の斜体は、過去に実在した人物が現在(あるいはそれに近い時期)にタイムスリップするタイプの作品である。無論、現実にはあり得ない話ではあるが、主人公に関しては、実際の故事などを踏まえて人物像が造形されることが多く、そこには一定の歴史的知識が反映されている。具体的には、大和田秀樹『ノブナガ先生』の織田信長(1534～82)、四葉タト・小川亮『パリピ孔明』の諸葛亮(181～234)、黒江S助『サムライ先生』の武市瑞山(1829～65)・坂本龍馬(1835～67)・岡田以蔵(1838～65)・陸奥宗光(1844～97)など、学校教育のみならず、歴史小説など他メディアを通じて人口に膾炙している人物が扱われ、そこでのイメージが、作中における現在の日本社会で再現されることになる<sup>5</sup>。なお架空の人物ではあるが、やはり現代日本にタイムスリップした架空の古代ギリシア人を主人公としつつ、双方の文化的相違を題材とする作品として、ヤマザキマリ『オリンピア・キュクロス』も挙げられる。

また、こうした現代へのタイムスリップものにグルメものが融合したタイプとしては、藤栄道彦『最後のレストラン』といった作品もある。なぜか現代日本のレストランにタイムスリップしてくる東西双方の様々な歴史上の人物に対し、彼らの要望に応えた料理が供されるという構図になっており、それらの料理の考案に際して、当該人物の成長過程や時代背景などの情報が織り込まれる点には、やはり彼らの既存のイメージの利用が見いだせよう。なお、同作品は主人公が上記レストランの関係者のため、表2に入れているが、タイムスリップの性格的にはこちらの類型に属する。

その一方で表2の斜体は、現代の日本人がやはりタ

4 いわば「ダークヒーロー」としてのリチャード3世像を形成するうえでは、W. シェイクスピア(1564～1616)の戯曲が大きな影響を及ぼしているが、そのシェイクスピアについては、彼の作品を基にしつつも、リチャードを両性具有者として独創的に描く菅野文『薔薇王の葬列』や、シェイクスピアの人物像及びその創作過程を題材とするハロルド作石『7人のシェイクスピア NON SANZ DROICT』といった歴史漫画も存在する。特に後者では、シェイクスピアがカトリックであったとの立場に基づき、プロテスタント系の国教会体制下での苦勞を示すなど、16～17世紀ヨーロッパにおける「宗派化」の動きの影響力を考えさせる素材ともなっている。

5 類似のタイプとして、同一人物ではないものの、クローンや魂の継承の形で歴史的人物の再来を描く作品——例えば、織田信長を始め戦国大名のクローンが高校生として活躍する甲斐谷忍『新・信長公記～ノブナガくん私～』(2019年～、現在WEB漫画サイト「コミック DAYS」で連載中)——もある。

タイムスリップして過去の世界に入り込むタイプの作品を示す。細川智栄子あんど美～みん『王家の紋章』を除き、そうした作品の主人公らは歴史上の実在人物の役割を担うことになるが、石川ローズ『あをによし、それもよし』では、彼らのタイムスリップ以前にはもともと不在であった山上憶良(600～733?)や藤原不比等の名を帯びて活躍しているのに対し、『信長協奏曲』においては、現実の織田信長は存在するものの、それとなり替わる形で当該世界に定着することになる(そのため、本来の信長は明智光秀と名を変え、別人として活動している)。どの作品でも、主人公に現代人的な感性が備わっていればこそ、当時としては異例な思考法に基づく成果や活躍を生み出し得たとの構図で描かれるが、その際、そうした成果が周知の歴史的事実と結び付けられる形で説明される点では、やはり一定の歴史理解を前提としているものと言える<sup>6</sup>。

### 3. 個々の作品の特色

以下では、さらに個別の分野に属する作品を取り上げて、現在の歴史漫画の傾向性について考察を深めることにしたい。

#### (1) フランス革命への関心の継続

先に近年の歴史漫画における多様化の傾向を指摘したが、その一方で、日本の幕末やフランス革命など、いわゆる定番のテーマについても、依然多くの作品が描かれているのも確かである<sup>7</sup>。舞台化・TVアニメ化もされた池田理代子『ベルサイユのばら』(1972～73年)が、日本社会における近世フランスおよびフ

ランス革命像に大きな影響を及ぼしてきた点には異論は少ないだろう。その存在感が大きければこそ、それとに差別化を試みるかが、作家としての狙いの一つとなる。

この点において、『ベルサイユのばら』と同様に架空の人物を主人公としながら、近年のフランス革命史研究の見解に重なる描写を示すのが、乃木坂太郎『第3のギデオンの』である。この作品の主調は、架空の人物である平民ギデオンのエーメと貴族ジョルジュ＝ド＝ロワールの2人の幼馴染による相克であるが、当時における身分制の描写のみならず、ルイ16世(1754～93)、マリ＝アントワネット(1755～93)、ロベスピエール(1758～94)、サン＝ジユスト(1767～94)ら実在の人物の新たな人物像も注目される。全体としては「父性」が最大のテーマとされているように思われ、ギデオンの父との関係に苦しめられる姿が描かれる。ルイ16世の処刑を現実に主導した革命家ロベスピエールの動機もまた、実父に対する憎悪から説明されている。

ただし、この作品でも平民と貴族との身分的な懸隔について触れられることはあるものの、『ベルサイユのばら』ほどに絶望的な断層とはされていない。暴動に参加する民衆たちの要求も、身分制の解体などではなく、むしろ必要な食糧の確保に代表される日常生活環境の改善が中心だった。『ベルサイユのばら』では男装の主人公オスカルの英雄的な死の舞台となるパリのバステューユ監獄にしても、本作では、沈静化を呼びかける司令官ド＝ローネ侯爵(1740～89)が狂乱する民衆の側に虐殺される構図で描かれている。とはいえ、学術的にはすでに20世紀前半から、

6 例えば、斎藤道三(1494～1556)の娘、濃姫(1535～?)を正室とした織田信長が、舅である道三と対面した際、正装を着こなして道三を圧倒したとされるのは、良く知られる歴史エピソードであるが、『信長協奏曲』では、信長になり替わっている高校生サブローが、「正装」という語のイメージから高等学校の制服を着て会見場に現われたことで、実はやはり現代からタイムスリップしてきた道三が彼の正体を知り、意気投合するという展開に脚色されている。ちなみに織田信長については、同様に現代日本の西洋料理シェフのタイムスリップを扱う西村ミツル・梶川卓郎『信長のシェフ』のほか、北原星望・原哲夫『いくさの子—織田三郎信長伝—』、本宮ひろ志『こううんりゅうすい〈信長〉』、重野なおき『信長の忍び』、藤堂裕『信長を殺した男—本能寺の変 431年目の真実—』でも主人公や重要人物として配置されており、歴史上の人物の中でも、信長の人物像やエピソードがいかに広範に認知されているのか(あるいは認知されていることを製作者側から期待されているのか)を物語る。

7 特に新選組については、実在の隊士市村鉄之助(1854～?)を主人公とする黒乃奈々絵『PEACE MAKER 鐵』、沖田総司(1842?～66)が主人公のヒラマツ・ミノル『アサギロ～浅葱狼～』、土方歳三(1835～69)が主人公の橋本エイジ『ちるらん 新選組鎮魂歌』、そしてロングセラー作品である沙村広明『無限の住人』(1993～2012年)の主人公、万次が新選組と渡り合う滝川廉治・陶延リュウ『無限の住人～幕末ノ章～』など、複数の作品が連載中である。後述する『ゴールデンカムイ』にも、史実としてはすでに死んでいるはずの土方歳三が元隊士永倉新八(1839～1915)とともに登場する。

歴史家 G. ルフェーブルの「複合革命」論に代表されるように、革命参加者の意識や要望の多様性、そして民衆の行動を規定した「大恐怖」などのパニックが指摘されてきた点からすると、『第3のギデオンの』に示されるフランス革命像は歴史研究上の知見と重なる部分が一層大きいと言える。18世紀フランス財政の困窮の原因にしても、宮廷の乱費ではなく、ルイ14世以来の莫大な軍事費負担に求められている点には、近世ヨーロッパ国家が総じて軍隊の強化を国策とする中、それを支える財政的基盤を確立した点に、第2次英仏百年戦争におけるイギリスの優位性を見いだす「財政＝軍事国家」論に適合する描写となっている。

奔放な王妃マリ＝アントワネットに振り回される貧弱な小男ルイ16世のイメージも、この作品では大きく覆されている。ルイが錠前作りを趣味としていたエピソードは良く知られるが、それを逆手に取り、巨大なハンマーを武器とする頑強な男性として示されるとともに、国難に対しても無為に看過せず改革を志向する君主として描かれる（なお、啓蒙専制君主としての彼の側面を論じる最近の学術的評伝として、プティフィス(2008)がある）。とりわけ重要なのは、父性をテーマとする本作品において、ルイが「国家の父」として位置付けられている点であろう。実のところ、歴史研究でも高橋(2001)において、革命前夜のルイ16世が地方行幸に際し、国民の父としての性格を強調したことが指摘されており、上述のルイ16世像もこうした学術的知見と共通するものと言える。

本作品のギデオン同様に、ルイ16世個人に対し一定の支持者・信奉者が当時存在していた点については、安達(2003)を原案とする、坂本眞一『イノサン』『イノサン Rouge』にも明示される。18世紀フランスの死刑執行を統括していたサンソン一族の棟梁シャルル＝アンリ(1739～1806)を主人公とする同作では、彼とルイ16世とを年来の友人として描く。ただし、最終的にルイ16世の処刑を担当することになるサンソンが、原案では、処刑台の上で王党派によるルイ奪還を心待

ちにしていたのに対し、本作においてはそこまでの心理的葛藤は示されない。むしろ両者の友人関係に基づきサンソンが、国王としての尊厳をもって処刑に臨むルイ16世に対し、敬意を込めて処刑台に迎え入れる構図で描写されている。その一方で、処刑の直後、元国王の死体から流れ落ちる「聖なる血」を求めて生じた暴動の情景は、まさに『第3のギデオンの』にも共通する、パニックに陥った民衆の姿である。その意味では、やはり新たなフランス革命像が意識されていると言えよう。

このほかにも18世紀フランス宮廷については、ルイ15世の公娼ポンパドゥール侯爵夫人(1721～64)を主人公とする霜月かよ子『ポワソン～寵姫ポンパドゥールの生涯』、マリ＝アントワネットお抱えの仕立て師を扱う磯見仁月『傾国の仕立て屋 ローズ・バルタン』などがあり、当該の舞台に対する日本での根強い人気がある。こうした人気自体が『ベルサイユのばら』に起因するのだとすれば、当時とは娯楽作品の種類の変化や浸透度の相違があるにせよ、歴史漫画が持ち得る影響力はやはり無視できない<sup>8</sup>。

また、これらには、過去の作品や通俗的イメージにおいていわば「悪役」や「日陰者」として描かれがちであった人物の再評価の試みも見いだせるが、そのような傾向は他作品にも見られる。例えば、その過酷さゆえに吸血鬼ドラキュラのモデルになったとされる15世紀ヴァラキヤ(現在のルーマニア南部)の君主ヴラド3世(1431～76)を主人公とする大窪晶与『ヴラド・ドラクラ』では、国内の反対派貴族に疎まれながらも、君主権力の強化を図り、大敵オスマン帝国との対峙の中で国益を守ろうとする政治家ヴラドの姿が描かれる。この時期のヨーロッパ諸地域において総じて、依然地方権力の自律性が高く、君主の主導性は必ずしも明確ではなかった点からすると、このヴァラキヤの情勢と中央集権化に向けたヴラドの苦難とは一概に例外的事例とは言えず、むしろ君主制国家全般の確立の過程を考察するうえで重要な手がかりを与えてくれる。

8 このような18世紀フランスへの関心の延長線上にあるものとして、「革命の申し子」ナポレオン＝ボナパルト(1769～1821)の活躍を描く長谷川哲也『ナポレオン—覇道進撃—』なども位置付けられるかもしれない。なお、この作品で描かれる、リーダー＝ナポレオンのカリスマを核とする破天荒な家臣団の凝集と団結とは、高橋のほる『劉邦』において、劉邦(前247～前195)の周囲に形成される侠客集団の姿とも重なる。中国史研究では、こうした民間の侠による人的結合の意義が注目されているが、その意味では、作品内での描写の極端さに惑わされず、そうした集団の結びつきとエネルギーとが、洋の東西を問わず、新興エリートによる急速な台頭を可能にした蓋然性についても、改めて考察する必要がある。

諸地域が分立していた15世紀イタリアにおいて、父であるローマ教皇アレクサンデル6世(1431～1503)の庇護下、半島の統一を志したチェーザレ＝ボルジア(1475～1507)にしても、マキアヴェッリ『君主論』で冷徹な現実主義者としての側面が強調されていることもあり、時に「覇道の君主」として批判されることもあるが、総領冬実『チェーザレ』ではその青年期からの活動が詳細に描かれる中、快活かつ人望に富む人物として、その印象は大きく変わるように思われる<sup>9</sup>。

これら時に定説や既存のイメージと異なる歴史漫画の人物像が、学術的により高い説得力を備えているかどうかについては、改めて精査する必要があることは確かである。その一方で、教科書などにおいて「歴史的事実(史実)」とされるものを単に暗記することで満足するのではなく、他の可能性を仮説として立て、信頼できる情報や合理的判断に基づいて信憑性を検討する作業が、歴史的に「考える」一助になるとすれば、こうした歴史漫画を触媒としての精査もまた、そうした歴史的思考の契機となり得よう。

## (2) 日本と周辺世界

二宮(2004, P. 4)でも指摘されるように、近代歴史学がそれぞれの「国民」に共通する歴史的過去の解明と伝播を通じ、国民国家の建設と共犯関係にあったとすれば、近年の歴史研究では「一国史」の範囲で諸地域の歴史的過程を語ることの限界性・問題性が指摘され、日本社会についても周辺地域との相互交流の影響が強調される傾向にある。歴史教育でも、例えば「国風文化」に関し、高橋・三谷・村瀬(2016, PP. 38-41)に紹介されるごとく、遣唐使の廃止により中国からの影響が絶たれることで、「かな文字」を始めとする日本固有の文化が独自に発達したとする従来の説明に代わり、日中の活発な交流の継続、中国文化の咀嚼・消化に基づく国風文化発生の図式が示されている。

近世に関しても、以前は「鎖国」というキーワードの下に国土の閉鎖性を強調する記述が支配的だったが、最近では完全な封鎖ではなく、一定の制限はあったにせよ、「四つの口」を通じて、外部との交流は維

持されていたとの構図が、小学校の教科書でも通例である。その窓口の一つ、北端の「松前口」において松前藩が交易を行っていたアイヌについては、蝦夷地(北海道)にとどまらず、樺太を始めとする島嶼部、さらにユーラシア大陸にいたるまで、彼らが広範な地域に生活していた点、それら多様な地域の文物が日本に流入した点も指摘されるようになっている。このアイヌの人々の具体的な生活や文化、世界観を克明に描写しているのが、野田サトル『ゴールデンカムイ』である。舞台は日露戦争直後と、すでに日本政府による同化政策の影響も大きくなっている時期とはいえ(例えば主人公の一人であるアイヌの少女も日本名を併有している)、食生活や服装、言語、死生観などの独自性が地域によっては一定程度残る形で、アイヌ像が描かれている。またこの時期、樺太を巡っては、1875年の樺太・千島交換条約、1905年のポーツマス条約を通じて日露間の国境線の変更が相次ぐが、若干の相違はあれ、樺太のアイヌも蝦夷地のアイヌと類似した文化を保持しており、彼らが国家の枠組を越えた共通性やつながりを維持してきた可能性を示唆する。近代世界における国民国家の理念——国民国家とは「同一の性質を持つ国民」によって構成されるべき、あるいは同一の性質を持つ住民が単一の国家を形成すべき——の虚構性を象徴する事例と捉えられる。連載中であり、具体的な展開が読めないところはあるが、これらアイヌの人々の変化が今後どのように描かれることになるのか、近代日本の国民国家化を評価するうえでも極めて興味深い。

同作でもう一点注目されるのが、ロシアとの関係である。先にも触れたように、この時期、日露間では国境画定の動きが進むが、それは両国がいわゆる直近の隣国の関係にある事実を改めて思い起こさせる。現在の日本にとってロシアは「最も近くて最も遠い国」とも称されるように、心理的には距離感のある国かもしれないが、とりわけ樺太(サハリン)を両国が分割して領有する形となった20世紀前半には、まさに地続きで両国は接触していたのである。また、そのロシアがユーラシア大陸の東西を接合する巨大な国土を有して

9 なお同時期のイタリアに関しては、前章で挙げたような日常性を重視する観点から描かれた作品として、女性の社会的進出が困難な状況下、画家を目指す少女を主人公とする大久保圭『アルテ』や、フェラーラ公国の商家の娘がクリミア出身の少女とともに地中海世界を旅する日之下あかめ『エーゲ海を渡る花たち』がある。特に後者では、当時のイタリアの食生活も紹介され、グルメものの性格も含まれている。

いた構図は、この『ゴールデンカムイ』においても、首都サンクト＝ペテルブルクでの運動に参加していた革命家らが、ロシア領を媒介して、蝦夷地に潜伏していたり、サハリンの監獄に収容されていたりと、物語の展開の中に色濃く反映されている。こうした革命家の中には、貴族出身ながら民衆（ナロード）の中に入り込んで革命を呼びかけた「ナロードニキ」を思わせる人物が含まれており、同時期のロシアの政治的・社会的変動もまた、本作には効果的に融合されているように感じられる。

日本の国土の歴史的な開放性に関しては、不老不死の実現を求めた秦の始皇帝（前259～前210）により日本に派遣されたとされる徐福（生没年不詳）を描く本宮ひろ志『こううんりゅうすい〈徐福〉』、明の永楽帝（1360～1424）の時代に複数回の大航海を行った鄭和（1371～1434）の船団に、船員として倭寇の集団がリクルートされていたとする星野之宣『海帝』など、他の作品にもうかがうことができる。また中世日本が、武士という戦闘に特化した集団を中心に未曾有の軍事大国として成長し、世界の諸地域にも影響を及ぼした可能性については、近年の歴史研究でも関心が高まっているところだが、その点に関連しては、戦国期の終焉とともに国外に生計手段を求めた武士の一人として、戦国日本で発達した小銃製造技術とともに、三十年戦争（1618～48年）時の中部ヨーロッパにおける日本人傭兵の活躍を描く真刈信二・DOUBLE-S『イサク』にも、こうした学術的知見と同様の時代観が反映されていると言えよう（ただし同作の主人公イサク（猪左久）自身の海外渡航の目的については、因縁のある日本人傭兵ロレンツォ（鍊蔵）の搜索と彼への復讐とされている）。

#### 4. 結びに代えて

全てを網羅的に分析するには程遠く、あくまで筆者の問題意識に基づく整理に留まるものの、以上の概観を踏まえて、歴史漫画の現状と歴史教育との関係性について改めて付言するなら、第1に、多様な人物・時代・地域を扱う作品が揃い、また（少なくとも著者の見る限りでは）娯楽性にも優れている点で、これらを通じて歴史への関心を喚起する可能性は十分にあり得るように思われる。その一方で留意すべきは、表にも示さ

れるように、作品の多くで歴史研究者の関与の有無が必ずしも明示されておらず、内容のどこまでが学術的知見とも一致するのか、どこまでが作者による創作・誇張なのか、不分明な点である。参考文献が示されている作品もあるが、それほど多くはない（無論、学術論文ではないので、典拠を明記していない点が批判の対象になるわけではない）。場合によっては、作者の独創による偶然の一致の結果が含まれるのかもしれないが、少なくとも既述のとおり、作品の中には近年の歴史研究の成果と重なる情報を持つものがあり、その点に関して、何らかの手段を通じ児童・生徒に伝えることができれば、歴史的過去に関する理解をより深める好機ともなり得よう。また虚構性が強い部分にしても、それが研究史上の定説とどう異なるのか説明することにより、歴史的事実に別途関心を向けることもできるように思われる。ただしいずれにせよ、具体的な手法については今後の課題となる。

第2に、いわゆる少年誌の掲載作品が少なく、早い年代から児童・生徒がこれらの作品に触れる可能性が乏しそうな点である。実のところ、現在高い人気を誇るとされる吾峠呼世晴『鬼滅の刃』（『週刊少年ジャンプ』2016年11号～20年24号に掲載）が大正時代を舞台としていることもあり、内容を確認してみたが、街並み、遊郭、機関車といった舞台装置に現在との相違を感じさせる要素も見られるとはいえ、実在の人物や歴史的事件が作中に登場することはなく、本稿の意図とは適合しないものと判断した。他の作品も含め、少年誌では少年漫画としてのメッセージ性（「友情・努力・勝利」など）や娯楽性を重視して、あえて情報を限定している可能性もあり、その意味では、歴史漫画を通じて歴史への関心を児童・生徒に喚起するという目的との距離感は、むしろ低年齢層の方で大きいと言える。とはいえ、2018年に『月刊コロコロコミック』3月号（小学館）掲載のギャグ漫画において、モンゴル帝国の建国者チンギス＝ハーン（1227年没）の肖像画の額に男性器を描いたことが、日本に居住するモンゴル人および駐日モンゴル大使館からの抗議を招き、雑誌の回収に至った事実は、児童誌や少年誌だからといって歴史に無関心であって良いわけではない点を示唆する<sup>10</sup>。

その一方で、これまでも紹介してきたように、暴力や性的描写を始め、低年齢層に読ませるのには躊躇さ



れる情報が含まれる作品もあり、一概に既存の作品を小中学生にそのまま提示することが適切か、その点は綿密に考慮する必要がある。

このような歴史漫画の現状を踏まえると、当初想定した低年齢層における歴史への関心の喚起の手段というよりは、すでに小学校6年生以降で歴史の授業を受けた経験のある中学生や高校生、そして大学生を主対象に、学校教育とは異なる、あるいは学校教育を補完する歴史体験を提供する機能を期待する方が適当かもしれない。また現実には、歴史漫画を実際に手に取り愛読する最近の読者自体、もともと歴史に強い関心を持ち、歴史的イベントや人物などに事前のイメージを備える例外的な存在であって、そうした前知識を裏切られることに楽しみを見いだしているきらいもある。しかしながら、本稿で整理した歴史漫画の多様性や魅力は、こうした一部の「歴史好き」を越えて読者を獲得し得る潜在力を有しており、そのような読者層の範囲の拡大、そして彼らの内面への訴求には、歴史教育上の大きな可能性がある点も否定できない。さらに、作品によっては小学生以下の低年齢層でも十分に理解したり楽しんだりできるものもあり、それらを通じての関心の涵養にも知恵を絞る意義は十分にあるだろう。

- 研究会・史学会編『教育が開く新しい歴史学』山川出版社 206-223ページ。
- 大阪大学歴史教育研究会編(2014)『市民のための世界史』(大阪大学出版会)。
- 大山誠一(2015)「聖徳太子という虚像——創作された理由」(歴史科学協議会編『歴史の「常識」をよむ』東京大学出版会) 24-27ページ。
- J. C. プティフィス、玉田敦子・橋本順一・坂口哲啓・真部清孝訳(2008)『ルイ16世』上下巻(中央公論新社)。
- 高橋暁生(2001)「ルイ16世のノルマンディ行幸(1786年)——期待された国王像」(宮崎揚弘編『続・ヨーロッパ世界と旅』法政大学出版局) 240-276ページ。
- 高橋秀樹・三谷芳幸・村瀬信一(2016)『ここまで変わった日本史教科書』(吉川弘文館)。
- 田中良英・堀田幸義・津田智史(2020)「小学校社会科教育における歴史的思考力の涵養に向けて——国語科教育との連携の可能性から探る——」(『宮城教育大学紀要』第54巻) 79-106ページ。
- 渡辺賢一郎(2015)「少女マンガの表現技法と歴史叙述としてのマンガ」(岡本充弘・鹿島徹・長谷川貴彦・渡辺編『歴史を射つ——言語論的転回・文化史・パブリックヒストリー・ナショナルヒストリー——』御茶の水書房) 316-337ページ。
- 幸村誠(2018)「【公開講演会】漫画でつなぐ、中世北欧と現代日本」(『史苑』第78巻第2号) 43-62ページ。

(令和2年9月30日受理)

## 文献

- 安達正勝(2003)『死刑執行人サンソン——国王ルイ16世の首を刎ねた男』(集英社新書)。
- 南塚信吾(2019)「歴史と出会う時」(南塚・小谷汪之編『歴史的に考えるとはどういうことか』ミネルヴァ書房) 3-30ページ。
- 桃木至朗(2009)『わかる歴史・面白い歴史・役に立つ歴史——歴史学と歴史教育の再生をめざして——』(大阪大学出版会)。
- 向正樹(2020)「バウンドする伝播のネットワーク——ウマ、火薬兵器、蒙古襲来」(秋田茂・桃木至朗編『グローバルヒストリーから考える新しい大学歴史教育——日本史と世界史のあいだで——』大阪大学出版会) 186-213ページ。
- 二宮宏之(2004)「歴史の作法」(『歴史を問う4 歴史はいかに書かれるか』岩波書店) 2-57ページ。
- 小川原宏幸・向正樹(2015)「わかる歴史から、考え実践する歴史へ——同志社大学の取組と構想」(大阪大学歴史教育

10 この事態に関しては、日本の外務省がモンゴル大使館からの抗議を仲介した点について、「表現の自由」への政治的介入として批判する意見もあるが、他者の感情や尊厳を傷つけるような「表現の自由」を権利として認めるべきか否かは、2015年にムハンマドの風刺画を掲載したことを理由に襲撃を受けた仏紙『シャルリ=エブド』が、2020年9月2日付けで同じ風刺画を再掲した事例が賛否両論を呼んでいる状況を見ても、非常に判断が難しい問題と言える。また、いずれの事件にも、他国の歴史や他国民の価値観に対する理解や想像力の欠如が働いていなかったかどうかは、精査する必要があるだろう。

